

提言 第4次安倍改造内閣に物申す。 次世代リーダー無き組閣に未来無し。

平成30年10月2日、第4次安倍改造内閣が発足した。おそらく平成最後の内閣となるだろうこの内閣の閣僚の顔ぶれを見ると暗澹たる気持ちを禁じ得ない。

その閣僚等の名簿たるや、留任組はさておき新入閣の面々が、どれも自民党の古株ばかりで若々しさが皆無なのだ。

振り返ってみれば、本誌は岸伸介内閣の時代から今日まで、長らく内閣の組閣に関与し続けてきた歴史がある。その記憶を辿ってみるだけでも、岸伸介内閣には党総務会長の佐藤栄作、政務調査会長の三木武夫、通商産業大臣の池田勇人といった後の首相が複数存在している。

さらに池田隼人内閣における大蔵大臣の田中角栄、佐藤内閣における、外務大臣の福田赳夫、そして再度通商産業大臣の田中角栄と、歴代内閣の主要ポストに必ず次世代の首相が存在しているのである。

それ以降も自民党政権における組閣においては、「三、角、大、福、中、安、竹、宮」、つまり三木武夫、田中角栄、福田赳夫、大平正芳、福田赳夫、中曽根康弘、安倍晋太郎、竹下登、宮澤喜一へと連綿とその系譜が受け継がれていく。

不幸にして、今の安倍晋三首相の父君、安倍晋太郎は次期総理を確実視されながら志半ばで夭逝してしまったが、それぞれの時代における内閣において、5～10年後の日本を担う次世代リーダーの存在が必ずあったということなのだ。

今回の第4次安倍改造内閣の顔ぶれを見るにつけ感じるのは、決して若くもない12人の新閣僚の存在である。これまでも「結果本位の仕事人内閣」を標榜してきた安倍晋三首相だが、はっきり申し上げて、初入閣では内閣の仕事は満足にはできないというのは歴史が語る真実である。

どう鼻屑目に見ても今回の組閣からは、安倍首相のニューリーダーを育成する意欲は全く汲み取ることができないのだ。自分だけ良ければよいという姿勢が丸見えであり、総理が良くて、副総理が良くて、官房長官が良ければそれで良いようにさえ見える。

そんな内閣が長続きするはずはない。

自党内にも、次世代の日本を託すことのできる人材はいるはずである。

一刻も早く次世代リーダーを発掘し、日本の未来を託すことのできる人材が存在する、次世代に向けた改造内閣を組閣することを切に望む。

本誌主幹 大中吉一